

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	華字婦人雑誌『女声』における編集者関露の早期思想：1930年代における関露の女性に関する作品と詩集『太平洋上の歌声』を中心に
Author(s)	谷, 雲星
Citation	倫理学研究, 27 : 1 - 15
Issue Date	2021-09-30
DOI	
Self DOI	10.15027/51898
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051898
Right	
Relation	



華字婦人雑誌『女声』における編集者関露の早期思想

—1930年代における関露の女性に関する作品と詩集『太平洋上の歌声』を中心に

谷 雲星

はじめに

『女声』は1940年代の日本占領区上海において日本政府の支持で刊行された唯一の中国語女性雑誌であった。編集長は日本人の田村（佐藤）俊子⁽¹⁾、編集者は中国人の関露、凌大嵘、趙蘊華である。雑誌『女声』は、日中の女性の人権や政治問題を含む特殊な存在であり、その意味で他の雑誌に比べ特別な働きをした。その理由の一つは、雑誌の中心的な編集者であった関露⁽²⁾と関わりがある。女声社に入る前に、関露は詩人や作家として活躍し、1930年代における掲載された作品も100篇以上に至る。出版された作品では、詩集『太平洋上の歌声』⁽³⁾と自伝小説『新旧時代』⁽⁴⁾が挙げられる。『女声』に入る前の関露についての先行研究はかなり少ない。管見によると、関露の詩歌から彼女の詩観を考察した王芳(2002)⁽⁵⁾と女性と戦争と国家の繋がりから論じた高翔宇(2018)⁽⁶⁾などがある。また、前川加奈子(2020)⁽⁷⁾は関露の初期の文学活動を取り上げ、関露の詩歌の特徴を分析し、「後に複雑な諜報活動を強いられる前の、故郷を想い、貧しい人々への共感を謳った作品が中心である」と結論付けた。しかし前川加奈子の論は考え直す余地がある。まず関露は女性労働者や女性の思想解放について数多くの作品(20篇以上)を発表した。その中で、女性の解放、社会への批判など彼女のフェミニズム思想が読み取られる。また、左翼詩人であった関露は戦争、植民地主義、帝国主義に対して幾多の作品を発表した。例として、出版された唯一の詩集『太平洋上の歌声』における22首の詩歌の中で、13首以上の詩歌は戦争や左翼の思想と関わっている。したがって、本論文では、関露の女性に関する作品と、『太平洋上の歌声』における左翼的な詩歌に注目し、『女声』に入る前の関露のフェミニズム思想や、左翼思想などを考察する。

関露の詩観

関露は1930年代における有名な女性詩人であった。彼女の詩歌は、主に大衆生活や社会現実を題材とし、易しくて覚えやすいものであったと思われる。では、関露は詩歌についてどのように考えたのか。まず、詩歌と婦女のつながりについて、関露は次のように述べていた。

五四運動以降の詩人たちは、外面的には男女平等、婦女解放、自由恋愛などを謳っ

ていたが、彼らは神聖の愛の観点から、すべてを理想化したため、現実社会の婦女たちの政治や社会の解放を考えたことがなかった。

(略)

それでは、現在の詩人はどのように女を謳うのか。それは、今の婦女はまだ解放されていないため、五四運動以降の封建主義と帝国主義への批判を引き継ぐべきだ。中華民族の危機は日々深刻になっており、婦女たちは国を滅亡から救う戦線で自分たちの解放を求めるべきだ。(中略)詩人たちは、数多くの圧迫された婦女に注目し、国を守る新たな戦線で国を愛し、帝国主義に抵抗している婦女たちを謳うべきだ。

(8)

関露にとって、詩歌（特に当時の新詩歌）は現実から離れるものではなく、現実社会や大衆生活を反映し、力強い呼びかけとして働くものであったと言える。また、彼女は「どのように詩を作るか」において、新詩歌の創作方法は社会主義リアリズムと革命的なロマン主義を結び付けるという新しい方法を検討した。

社会主義リアリズムと一般的な現実主義とは違う。社会主義リアリズムとは、社会主義の実現、労働者の闘いと歴史発展における複雑性を書き記すものである。しかし、一般的な現実主義はただ社会現象の一部や客観的な対象を静的なものとして記述し、社会を進む熱情がなく、歴史発展と社会運動の行き先が見られないものだ。

(略)

今の新たな環境から見ると、ロマン主義は幻想的な天国へ向かうのではなく、人間に向かうもの、敵や自然への征服に向かうものである。社会主義リアリズムは現存する物への記述のみならず、現在の状況を把握し、将来の発展を跡付けるものである。したがって、この両者を対立させる意味はない。(9)

詩にはリリズムをもち、短い文句の中で深くてロマンチックな感情が含まれている。しかし関露には、詩歌や文学作品はロマンチックなものに限らず、現実から革命の為に、労働者の為に、社会民衆の為に働くものとなった。そのため、彼女は理想的な詩歌、あるいは当時社会の状況が反映されていない詩歌を非難した。関露の詩観について、王芳は「関露の観点は著しい時代性と政治的な特徴があるが、芸術の発展における自身の内的な規律と、文芸と社会政治や経済発展の間に存在しているアンバランスが無視された」(10)と論じている。的確に、現実社会を取材し、社会発展を進める詩歌や文学作品を作る関露の考えには当時の時代性があるが、それを当時の良い詩歌の唯一の基準とすること

が過激な考えであったといえるだろう。また、後のことだが、詩歌を深く愛している関露は『女声』に発表した 100 篇以上の作品の中で、詩歌を 1 首も発表しなかった。その原因の一つは関露自身の詩観—理想的な詩歌や当時社会に役立たない詩歌を書かないことと関わると言えよう。次節から、関露の具体的な詩歌や作品を取り上げ、彼女の早期思想を明らかにする。

関露の女性解放論—女性に関する詩歌から

まず、1930 年代における関露が発表した女性に関する詩歌の内容の一部を表 1 にまとめた。(下線はすべて筆者によるものである)

表 1 関露が女声社に入る前の女性に関する詩歌⁽¹¹⁾

作品名	具体的な語句	要素
「機の声」 (「機聲」) (『新詩歌』第二卷第四期 1934 年 12 月)	お母さん、ありがとう、 娘を育て、自分の命をなくしてしまった。 いま、あなたに会えなくなったが、 あなたが使った機を壊して残している。(略) <u>母さん、明け方まで機を織るのは、</u> <u>あなたの仕事を受け継ぐのではなく、</u> <u>人様のために強固にするためなのです、</u> <u>あの大きな資本を！</u>	搾取された女性 労働者
「絶えず仕事」 (「日夜班」) (『婦女大衆』第一卷第三期 1936 年 3 月)	腹が減って寒くて一年、また一年。 親が言う：「 <u>娘よ、我慢しな。待っているよ。</u> <u>給金をもらって、送ってくれると利子を返せる」</u>	生活の苦難
「貞操がある婦女」 (「節婦」) (『婦女生活』第四卷第五期 1937 年 3 月)	寂しい夜に、寂しい朝に、 清浄な霊位を守って、私の青春を過ごした。(略) <u>私が望んでいるのは、</u> <u>ただ貞操の華表、光栄ある碑文。</u>	貞操観念
「女国民」 (『抗戦』三日刊第三)	私たちにはある、熱い血、 怒りの心、力強い肩、勇み立つ精神。	解放、自由

号 1937年8月)	<u>民族の解放がなければ自由や平等はない。</u> <u>立ち上がれ、女の同胞たち。</u>	
「抗戦する婦女」 (『高射砲』創刊号 1937年8月)	私たちは勇ましい戦士、 スペイン戦士の精神をもとう、 私たちは東四省を取り返し、敵軍を掃蕩しよう。 <u>私たちは中華民族の女だから、むしろ闘って死に、</u> <u>民族の未亡人とはならない。</u>	民族の解放
「戦う女たち」 (「戦時的婦女」) (『戦時婦女』第三期 1937年9月)	立ち上がれ、さあ私たちの血で、 民族の恥を洗い流し、 敵の旗で、私たちの頭を覆わせたりはしない。 女たちは、昔から自由を想い、 自由のために、生死を恐れずに闘った。 いま、まさに生死存亡の秋、 敵の強盗軍が、私たちの自由を売り出させようとしている。(略) <u>女の解放と自由は、民族の解放の後にある。</u>	戦争、解放

詳細な詩歌の内容は前川加奈子の先行研究(注(7))を参照されたい。ここで、取り上げた詩歌における関露の女性解放論を主に三つの特徴にまとめた。

(1) 圧迫された女性労働者の苦しみを反映し、当時の残酷な資本家を風刺すること(例えば「機の音」や「絶えず仕事」など);(2) 心に浸透した古い観念で生きている女たちの苦難を披露し、貞操などを批判すること(例えば「貞操がある婦女」など);(3) 女たちが立ち上がって帝国主義や植民地主義と戦うのを訴えること(例えば「女国民」や「抗戦する婦女」など)。

要するに、関露は資本主義、封建主義、帝国主義という三つの山を越えなければならぬと主張した。また、「民族の解放がなければ自由や平等はない」、「女の解放と自由は、民族の解放の後にある」のような当時の関露の女性解放論は、民族の解放を首位にすることであった。これは当時の婦女運動の基本方向⁽¹²⁾と一致している。それについて高翔宇(2018)⁽¹³⁾は既に論じたため、ここで展開されない。

関露のフェミニズム思想—女性に関する文章から

1930年代にかけて、関露は詩人に限らず、女性作家として様々な雑誌に投稿した。その内、女性に関する作品を表2にまとめた。

表2 関露が女声社に入る前の女性に関する作品(詩歌以外)

作品名(中国語)	掲載された雑誌名
她的故郷	『幼稚』第6期 1930年4月7日
蘇聯婦女和兒童的幸福	『女子月刊』第1巻第9期 1933年11月15日
今年的我	『申報第324巻』1935年1月6日
罵人和恋愛	『申報第324巻』1935年1月27日
現代美國的婦女	『申報第326巻』1935年3月3日
姨太太日記	『申報第326巻』1935年3月24日～4月28日連載
關於一杯水的恋愛論	『申報第331巻』1935年8月25日
介紹『大地的女兒』	『婦女生活』第1巻第4期 1935年10月1日
一個禱告的女人——冬夜的回憶	『大晚報』1935年11月27日
一・二八時候的婦女	『大晚報』1936年1月28日
詩歌與婦女	『婦女生活』第2巻第4期 1936年4月16日
婦女從軍的歷史劇	『婦女生活』第5巻第5期 1937年11月20日
送戰時婦女和她的努力的朋友們	『戰時婦女』第11期 1938年1月1日
女作家印象記——女戰士丁玲	『上海婦女』第2巻第8期 1939年2月5日
洛義先生與保琳——一個白人與一個黑人女孩的恋愛故事	『上海婦女』第3巻第11期 1939年11月25日

表2に示されている通り、関露は女性に関する文章を15篇以上発表した。その中で、関露は「今年の私」⁽¹⁴⁾において、「今の女性是不公平な社会制度と戦い、現実社会における女性の『肉体市場』を『労働市場』に変えるべきだ」と呼びかけた。「一杯の水の恋愛論について」⁽¹⁵⁾では、「封建社会で女性たちに押し付けた貞操や経済などの桎梏を脱しなければ、多くの男女たちの恋愛は真の愛ではなく、ただの嘘と儂いものに過ぎない」「私たちの恋愛は単純に人間の性欲を満足させるものではなく、自由、平等、真実のも

のとなっている」と指摘されている。「『大地の娘』を紹介する」⁽¹⁶⁾で、関露はアグネス・スモドレー⁽¹⁷⁾の著作『大地の娘』を紹介した。「男尊女卑の社会で、女性は経済的に独立すると、発言権も得られる」「世界中で、無数の女は苦しい生活を送っている。特に植民地で支配された女は、まだ解放されていない」⁽¹⁸⁾と書かれている。また、上海が完全に占領区になり、多くの人が上海から内陸へ移動したとき、関露は「『戦時婦女』と彼女の努力している友達へ」⁽¹⁹⁾において、「上海以外の都市で、数多くの婦女は民族の解放の為に闘うのを待っている。皆様は内陸へ行って、彼女たちを助けてください。皆様の革命の熱情を何千何万の女性同胞と中華民族へ分け合ってください」と提言した。

特に注目するのは、関露は「罵言と恋愛」⁽²⁰⁾において、フェミニズムの視座から中国人の罵り言葉「他妈的」⁽²¹⁾を取り上げ、「もし男が女を侮るならば、『性』から女を罵るのは最も直接的な方法」「相手が女なら、本人を罵る。相手が男なら、彼の母親、姉妹、娘など、女性の親戚から罵る」というような「『性』(特に女性)を対象として他人を罵る方法」から「女性を侮る意識が普段の文句に浸透する」ことを指摘し、「封建社会で女性すべては付属品とし、性的関係においても女性は付属的、受動的な存在であった」と検討した。たしかに、封建社会における女性たちは貞操を守らなければならなかったため、「性」に関わる悪口は彼女自身や彼女の家族にとって大きな不名誉を被ると考えられる。興味深いことに、1925年に魯迅⁽²²⁾は類似の言論—「他妈的」について⁽²³⁾を発表した。ここで魯迅の「『他妈的』について」に少し触れたい。

誰であれ、中国に暮らしていれば、しょっちゅう「他妈的」あるいはそれに類した決り文句を耳にしているはずだ。この言葉はおそらく中国人の到るところすべてに分布し、使用の頻度は品のよい「您好呀」⁽²⁴⁾(発表者注:「こんにちは」の意味)より少ないとは言えぬだろうと思う。ある人の説に従い、牡丹を中国の「国花」であるとすれば、これは中国の「国罵」としてもよいのではあるまいか。

(省略)

権勢と威光は、そもそもただ一つ「先祖」という護符のおかげによってのみ存在し得るのであれば、「先祖」が打ち毀たれてしまえば、何もかも崩壊してしまうのである。(中略)名門豪族の古い堅固なとりでを攻撃するのに、その血統にねらいをつけるとは、戦略上、誠に天晴といわねばならぬ。

(省略)

中国人には、今でも無数の「等」がある、やはり家柄にたより、祖先をたのみとされている。これは改めないなら、有声無声の「国罵」が永遠に存在しつづけるだろう。「他妈的」が、上下、四方をとりかこんでいるのではないか、この太平の時にさえ。⁽²⁴⁾

ここからわかるように、魯迅は「他妈的」を「国罵」として取り上げ、当時中国の残された古い観念（例えば先祖を崇拝すること）を批判した。一方、女性作家であった関露は性の立場から、男尊女卑の社会で女性への性差別を指摘した。実は「他妈的」のような罵る言葉は現在の中国においても使われている。しかも、女性への性差別が薄くなり、ただ相手を罵るとき、自分が悪い気分になるときに使う罵る言葉であると思われる。以上のことから、関露の作品を分析した上で、彼女が当時残された古い観念や女性への性差別を批判し、女性の地位向上を目指すフェミニズム思想を明らかにした。また、知識がある女性は一般的な女性たちを助けるべきだと、彼女は提唱した。

関露の左翼的思想—『太平洋上の歌声』における詩歌から

関露は左翼詩人として、数多くの左翼的要素が強い詩歌を創った。ここで出版された詩集『太平洋上の歌声』に注目し、彼女の左翼思想を検討する。それらの詩と要素の対応を表3にまとめた。

表3 『太平洋上の歌声』における左翼的要素と戦争的要素⁽²⁵⁾

作品名 (括弧の中は中国語原 題となる)	具体的な語句	要素
「太平洋上の歌声」 (「太平洋上の歌声」)	牙を剥いている、 大きい掌を伸ばしている、 <u>東三省、熱河を握る、</u> <u>全支那の x x を凶暴な目で見つめている、</u> 煙がもくもく出ている火薬庫、 高い温度の手榴弾、 国際軍縮後の武装製造所がある。 <u>勇ましい将軍、勇ましい大臣は、</u> <u>天皇に仰せつかる。</u> <u>大波、煙霧、埃、</u> 飛行機、艦隊、陸軍；	戦争、植民 地主義

	<p><u>満州里、綏芬河、長江、シベリアへ、</u> <u>砲の埃をこぼしながら、</u> <u>人の血が湧きながら、</u> <u>前に進んでいる。</u></p>	
「風波亭」	<p>売国の奸臣が言う： 「あなたは兵を率いて、民を損ない、国をあやまる。 <u>祖国の長計のために、敵国を友邦に化し、</u> <u>敵と『和平協定』を結ぶ。</u> <u>自分の国を敵に分割されても、</u> <u>朝廷は安定がよければいい、</u> 国土統一と関わらない、 敵軍に生け捕りにされた二君と関わらない。」</p>	政府の消極的な対応策
「星明かりのない夜」 （「沒有星光の夜」）	<p>うわさに聞く： あなたみたいな死者は何千何万もいる、 毎日たくさんいる、 毎年たくさんいる； <u>毎回戦争があればたくさんいる。</u> <u>死者は今回のみ、</u> <u>生存者は次回まで待っている。</u> <u>人は銃より多い、</u> <u>人は銃より卑しい。</u></p>	大量の死者
「ゴーリキーを悼む」 （「悼高爾基」）	<p>我々は平和が好き、 しかし、 <u>人間の解放と自由のための戦争を頌する。</u> （省略） あなたは新しい国の人に教えた：（略） <u>私たちのそばに、帝国主義の強い隣人がいる。</u> <u>彼らは侵略と横暴な毒手を伸ばして、</u> <u>しばしば武器をもって私たちに攻め込む。</u></p>	帝国主義、自由と解放

<p>「失地」</p>	<p>白い月、赤い太陽 緑の草原、 古い城壁； もとは父母たちの邦が、敵の土に変わった。 みんなが言う： <u>昨夜、外国兵が来た。</u> <u>我々の中で抵抗する者はいなかったと。</u></p>	<p>民衆の無力感</p>
<p>「あなた、行け」 （「你去吧」）</p>	<p>行け！ 銅鑼と太鼓が鳴っている広場で、 我々の隊伍を組んでいる。 <u>銃を挙げて、敵を狙っている。</u> 一二三四五、 前の列の位置はまだ空いている。 あなたを待っているよ！ 行け！</p>	<p>入隊の呼びかけ</p>
<p>「逃亡者」</p>	<p>しかし、本当にあなたたちを銃撃して殺す人は、兵士ではなく、兵士は寛仁である； 兵士たちはあなたたちを殺さない、 あなたたちを打ち壊さない。 <u>あなたたちを打ち壊すのは、</u> <u>動員令を下す敵国の将軍、</u> <u>私たちを侵略する x x。</u></p> <p><u>猛々しい敵— x x、</u> <u>彼は私たちの家を壊した、</u> <u>私たちの服を脱がした、</u> <u>私たちの婦女に姦淫をした。</u></p>	<p>民衆の悲しさ</p>
<p>「マヤコフスキーへの 思い出」 （「紀念馬亞可夫斯基」）</p>	<p>マヤコフスキー、 <u>敵は私たちの領地を侵略した。</u> しかし、私たちの悲壮な大衆詩歌が まだ興っていない。</p>	<p>戦争</p>

<p>「さようなら、恋人」 （「別了，戀人！」）</p>	<p>あなたは言う： <u>あなたが前に進んで、</u> <u>敵の陣営を突き破るべきだ。</u> あなたはわかる、 あなたが憎んでいるのは、 全てあなたの敵である。</p>	<p>兵士を励ます</p>
<p>「囚徒」</p>	<p>もがいている顔に、 記載されている顔に、 <u>敵への示威が表されている、</u> 千年以来の人間の事件が表されている、 あなたの後ろに勇ましい部隊がいることが示されている、 <u>あなたが死んだ後、推し進めた歴史が前に進むことが、表されている。</u> もがいている顔に、 そのもがきは減びない。</p>	<p>抵抗の意義</p>
<p>「戦地」</p>	<p>煙と火が溢れていた夜に、 煙と火が溢れていた広場で、 <u>刀と銃を持っている隊伍が来た、</u> <u>馬に乗っている騎士が来た、</u> <u>それは新年だが、</u> <u>それは戦地だ。</u> （中略） 昨夜の煙と火が溢れていた夢の中で、 昔の思い出を心に浮かべた。 昔のふるさと、昔の隣人を思い出した、 馬に踏みにじられた田畑を思い出した、 <u>戦争後農村に溢れていた死体を思い出した、</u> <u>あの新年、あの戦地の煙を思い出した、</u> ふるさとを失った男女たちを思い出した。</p>	<p>民衆の苦難</p>
<p>「私の故郷よ、あなたを滅亡させない」</p>	<p>あなたの夢を見た、 あなたの現在のことを夢の中で見た、</p>	<p>戦争、民衆の苦難、</p>

<p>（「故郷、我不能讓你淪亡」）</p>	<p>あなたの過去のことも夢の中で見た。 <u>見て、その失われた隣地を。</u> <u>敵の翻っている旗の下で、私たちの同胞は</u> <u>何人いるか、</u> <u>流離、飢餓、奴隸、死傷；</u> <u>敵の走ってきた馬が連れた埃の中で、</u> <u>この国は滅亡に向かっているのを示して</u> <u>いる。</u></p>	
<p>「悲劇之夜」</p>	<p>やって来るだろう血生臭さの中に ただけしい兵士が溢れている： <u>東の方から来たのだ、小さな島国から、</u> <u>人殺しと侵略の野心をもって来た。</u> （中略） 「俺たちはこれまでと同じように行く、 満州里、熱河、東三省と。 見ろ、俺たちの刀剣と銃身に付いている生 臭い血を！」 （中略） 「悲劇之夜」の夜、一二八（発表者注：第 一次上海事変）の夜、閩北の夜、 この夜に消息が伝わって来た： 民家があったところは曠野になった、曠野 は戦場に変わった。 <u>東方文化を満載した壮麗な図書館は、黒焦</u> <u>げた塊と残骸に化し、少年たちを教えた莊</u> <u>嚴な校舎は、凋落した壁を残した。</u></p>	<p>戦争の酷さ 民衆の苦難</p>

関露『太平洋上の歌声』（上海）生活書店 1936 年（復刻版、上海書店 1984 年）による

以上の内容から、関露の詩歌において、帝国主義への憎悪、民衆への同情、政府への不満など、様々な感情が表されている。特に「逃亡者」において、「あなたたちを打ち壊すのは、動員令を下す敵国の将軍、私たちが侵略する x x」「猛々しい敵— x x」では、二ヶ所が伏字となっている。関露の詩歌の中で、1932 年に発表された処女詩「逃亡者の夜歌」⁽²⁶⁾は、「逃亡者」と半分以上の内容が類似している。「逃亡者の夜歌」⁽²⁷⁾では、「私

たちを打ち壊すのは、私たちの敵—日本、猛々しい敵—帝国主義」と書かれている。こちらの語句から、彼女が帝国主義を猛烈に批判した態度が読み取られる。また、関露は常に「ふるさと」という言葉を使ったが、大半は自分の故郷ではなく、彼女が「愛している国家」「侵略された土地」を指していると考えられる（例えば「私の故郷よ、あなたを滅亡させない」など）。詩集が出版された後、何人かの学者は関露の詩集を評論した。例えば、君平⁽²⁸⁾は「『太平洋上の歌声』を論じる」⁽²⁹⁾において、「関露の詩集は侵略された中国人民の苦しみを示したのに限らず、今の中国には全国の力、中華民族の力を凝って帝国主義を抵抗する道しかないのを大衆に広げた」と論じた。また、易青「『太平洋上の歌声』を読んだ後」⁽³⁰⁾において、「関露はよくエビグラムを使って戦争や帝国主義を批判する。『太平洋上の歌声』は戦争への抵抗性を持ち、現実的、新しい人間の芸術史においても高く評価できる詩集であった」と書かれている。『太平洋上の歌声』が高く評価された理由の一つとして、高翔宇(2018)⁽³¹⁾は、「革命と戦争の社会環境において、性別の構造と民族、国家の間に同様の構造関係を持つ」「要するに、女性作家が作った作品の主題は『国防文学』の基準と民族の解放という主題と一致しているかどうかは、当時の文学作品の価値を判断する重要な基準の一つとなった」と指摘した。

むろん、関露の詩集のみならず、他の雑誌に投稿した詩歌や文章でも左翼的要素が含まれている。彼女の左翼思想は主に民衆の苦難や戦争の残酷さをめぐって展開されたものであった。民族の解放の為に、民衆は立ち上がって帝国主義と戦わなければならないと、彼女は呼びかけていた。

おわりに

以上、述べてきたように、『女声』に入る前の関露の早期思想、主に彼女のフェミニズム思想と左翼的思想を考察した。男尊女卑などの封建主義を批判し、男女平等を目指し、民族の解放を首位にした左翼女性作家関露は、当時の中国社会には不可欠な知識人と言えるだろう。その後、彼女は共産党地下工作員(スパイ)として日本側の雑誌『女声』に入ると、『女声』時代の彼女のフェミニズム思想はどのようなものになったのか。紙幅の制限のため、別稿を設けて論じることとする。

註

(1) 田村俊子(1884-1945)、明治大正期に大活躍した女性作家。別名佐藤露英、本名佐藤俊子、『女声』で「左俊芝」という中国名もあった。日本近代文学史上に「田村俊子」の名を残す。1918年カナダへ渡り、カナダで日系移民の女性労働者に対する思想啓蒙を

行った。1938年から中国に渡り、1945年四月に上海で逝去した。

(2) 関露 (1907-1982)、1930年代有名な左翼詩人であった。1932年共産党に入党し、1942年に共産党地下工作員として『女声』雑誌社に入り、編集者を担当し、『女声』に100篇以上の文章を発表した。戦争後、「漢奸活動」のため1955年～1957年と1967年～1975年合計10年間投獄された。1982年3月、共産党中央から「関露の名誉回復の決定について」を公布し、戦時中の諜報活動が共産党の指示によることだったと公表した。同年12月に自殺した。

(3) 関露『太平洋上の歌声』(上海)生活書店、1936年

(4) 関露『新旧時代』光明書局、1940年；『新旧時代』は関露自身をモデルにした小説だが、関露が作ったことが多い。近年、多くの伝記はこの自伝小説に基づいて出版されたため、事実と異なることが少なくない。比較的、丁言昭(例えば『関露伝』上海文化出版社2009年)は多様な史料を調べ、関露本人、関露の友達、丁言昭の父親丁景唐(共産党地下工作員、『女声』に作品を56篇投稿した)から取材したため、彼女の伝記の信憑性が高いと考えられる。

(5) 王芳「関露の新詩観」『中国现代文学研究丛刊』2002年(02)

(6) 高翔宇「性別戦争與国家的変奏及書写——以関露为中心的考察」『婦女研究論叢』2018.9

(7) 前山加奈子「時代に生き、時代に翻弄された女性作家・関露(特集 歴史と世界文学 2))」『世界文学』、世界文学会、2020.7

(8) 関露「詩歌與婦女」『婦女生活(上海1935)』第2巻第4期 1936年4月7日

(9) 胡楣(関露の筆名)「用什么方法去写诗」『新詩歌』第2巻第4期 1934年12月1日

(10) 王芳(2002)前掲

(11) 「貞操がある婦女」は発表者による訳文であり、他の五篇は前山加奈子(2020)(前掲)によるものである。

(12) 1938年5月、蒋介石の妻宋美齡は戦時婦女運動を指導し、婦女問題をめぐって全国婦女会議を催した。その時、戦時婦女運動の基本方向の中で、「民族と独立と解放がなければ、婦女の解放と自由はない」と書かれている。

(13) 高翔宇(2018)前掲

(14) 関露「今年的我」『申報第324巻』1935年1月6日

(15) 関露「關於一杯水的戀愛論」『申報第331巻』1935年8月25日

(16) 関露「介紹『大地的女兒』」『婦女生活』第1巻第4期 1935年10月1日

(17) アグネス・スメドレー (Agnes Smedley, 1892~1950) は、アメリカ合衆国の女性ジャーナリス。1929年中国に来て、左翼思想を積極的に宣伝し、中国の革命に貢献した。著作は『中国の歌声』(高杉一郎訳)、『偉大なる道—朱徳の生涯とその時代』(阿部知二訳)などが挙げられる。

(18) 注(12)に同じ。

(19) 関露「送戦時婦女和她的努力的朋友们」『戦時婦女』第11期 1938年1月1日

(20) 関露「罵人和戀愛」『申報第324巻』 1935年1月27日

(21) 「^媽妈的」とは中国人がよく使う罵り語であり、日本語の「クソ」と同様な意味を持つが、中国語の「^媽妈」はお母さんの意味、他人のお母さんを通して罵る言葉である。

(22) 魯迅(1881-1936)、本名周樹人、中国有名な小説家、翻訳家、思想家。著作は『狂人日記』、『孔乙己』、『故郷』などが挙げられる。詳細は『魯迅全集』を参照されたい。

(23) 魯迅「論『他妈的』」『語絲』週刊第37期 1925年7月27日

(24) 魯迅「論『他妈的!』」『語絲』週刊第37期 1925年7月27日；引用は『魯迅全集1 墳・熱風』魯迅著 伊藤虎丸等訳、学習研究社1984年 pp.299-305(北岡正子訳)による。

(25) 『失地』と『悲劇之夜』は前山加奈子2020(前掲)による引用したもの、他の11篇は筆者による拙訳である。

(26) 胡楣(関露の筆名)「逃亡者の夜歌」『流火月刊』第2巻1期 1932年1月1日

(27) 同上

(28) 原名鄭伯奇(1895-1979)、有名な左翼作家、日本京都大学文学部卒業。代表作『軌道』、『抗争』等。

(29) 君平「評『太平洋上の歌声』」『大晩報』1937年1月18日、丁言昭編『関露関露』人民文学出版社、2001(pp.229-232)に収録。

(30) 易青「讀了『太平洋上の歌聲』以後」『婦女生活(上海1935)』第4巻第1期 1937年

(31) 高翔宇(2018)前掲

The Early Stage of Guan Lu, the Editor of the Chinese Women's Magazine "Women's Voice": Focusing on Guan Lu's Works on Women in the 1930s, and Her Poetry Collection "The Song on the Pacific"

GU YUNXING (Hiroshima University)

This paper analyzes the early stage of Guan Lu, the editor of the Chinese women's magazine "Women's Voice" (before she surreptitiously joined "Women's Voice" as an underground member of the Chinese Communist Party), as a work created by a famous left-wing female poet at that time, and explores her feminist ideas and thoughts. Left-wing thinking.

In the early days, Guan Lu published more than 20 articles on female laborers and women's ideological emancipation. At the same time, as a keynote of left-wing poets, she created many works centered on themes such as war, colonialism, and imperialism, focusing mainly on criticism of feudalism and the inferior position of men and women under it, true equality between men and women, and the national liberation of semi-colonial China. Guan Lu, a left-wing female poet, believed that women's liberation should be achieved only after national liberation, as only when the nation is liberated can women achieve true liberation. Guan Lu's poems and essays had a tremendous impact on the public of that time.